



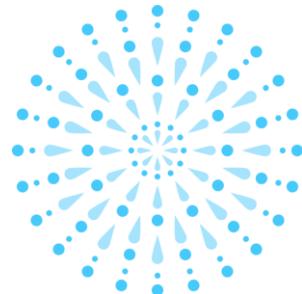
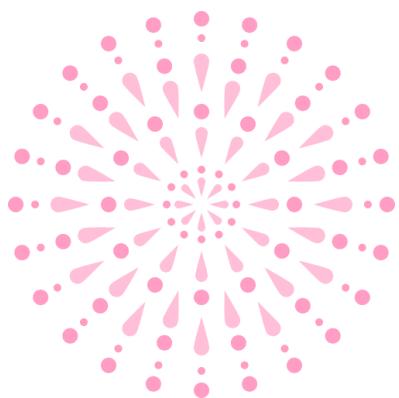
金子公宥

私の短歌

花

火

金子公宥





コンバインの音
二色の浜
アルバイト
なぜだろう
ケンタッキーまで三昼夜
からだが資本
生きる証
歐米いろいろ
苔むす宿
モンゴルの力士
沖縄の寒波
日本はイイネ
ガザの街中
カエルの足取り

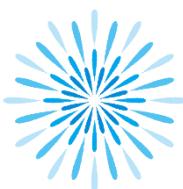
33 31 30 28 25 23 20 17 15 13 11 7 9 4

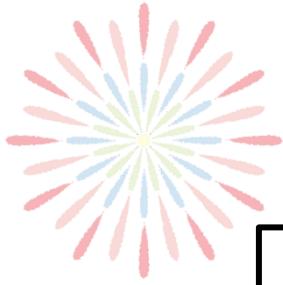
目

楊貴妃の顔
盆栽の松
百歳人口
活力の元
ふるきとの伊豆
里に来るクマ
紀国の山々
城のシャチホコ
我が魂うばう
死んで帰れ
滑落のテトラポッド
悪運強き人生
デジタル化の世

63 61 59 56 53 51 49 46 44 41 39 37 36

次





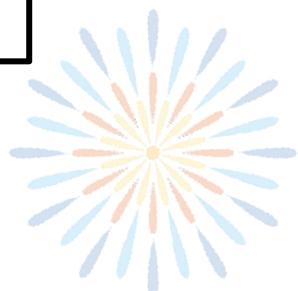
本歌集は、公民館の短歌教室で約十年間に詠んだ歌を中心に、

自分の人生を詠み込んだ歌なども加えて編んだものです。

ご一読いただけたら幸いです。

令和七年十二月二十日

金子公宥



コンバインの音

信号機寂しくないか今宵また

点滅つづける赤青黄色

朝早くトカトカトンと聞こえ来る

コンバインの音そよ風に乗つて

短歌詠む日々の楽しさ教えられ

悩み忘れて時の過ぎ行く

(註)短歌は「一首を続けて書く」のが常道であるが、読み易くするため、本歌集では敢えて一首二行とした。



若き口に牛馬を駆つて登り来し

奥箱根はいまゴルフ場

理科系で縁なき道と思ひいし

短歌詠み初む七十六歳

そ

朝まだき眠いながらも出発だ

ダイヤに従う私は電車



山茶花の咲きたる土の隙間から

そつと顔出す紺の朝顔

自転車の母の背なかで眠る子の

プヨプヨほっぺに花びらひとつ

垂れ下がるほおずき真っ赤に色づきて

明るく照らす冬枯れの道



一色の浜

一色の浜ザブンドロンと寄する波

岩に砕けて白き花咲く

ねこじやらし穂先にたつぱり夏をため

ふれれば崩れ種をふりまく

猛たけくして空地に広がるネコダマシ

月の光に白くかがやく



沈みゆく夕日の輝きいやまして

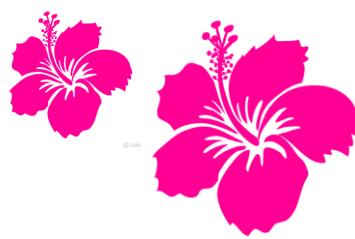
光の粒が海にちらばる

突然にテトラポッドを滑落す

意識のあればわれは生きてる

背伸びして垣根をこえしハイビスカス

色濃いピンクが夕日に映える



© dsk

アルバイト

高校に入学するや創設の

購買部ではパンがよく売れ

入学し最初の一ヶ月バイトする

学問よりも生きるが先と

食いぶちが自分だけなら何とかなると

上京果たせし十八の春



ビラ配り。ピエロ姿の看板持ち

彫刻モデルが自慢のバイト

口コミで客は次々広がりぬ

便利屋稼業で商売繁盛

ダメモトの大学院に合格し

貧乏暮らしの新たな幕開く



針金のとび出たカバン見かねてか

使い古しを差し出す師匠

なぜだろう

若者の鋭い問いを受け切れず

床とこについても眠れ得ぬ夜

研究が病み付きとなるその訳は

「そうだったのか」に出会う喜び



難問に挑戦するのが楽しいと

豪語するわれ悩みの尽きず

同期会半数の友が鬼籍入り

明日は我が身か八十八歳

柵内で討論している人間を

じつと見ているサファリのインパラ



ケンタッキーまで二昼夜

空港をいま飛び立ちし飛行機の

背景色どる茜色の雲

横浜でこつそり船にもぐりこみ

アメリカ渡航を夢見し若き日

アメリカへ留学する夢捨てきれず

貨物船にてシスコに往きき



初めての留学先はケンタッキー

五十年もの歳月過ぎる

シスコからケンタッキーへ三昼夜

バスにて東へひた向かいしよ

アメリカで暮らしあじめしスマラム街

インドネシアの友と仲良く



からだが資本

終戦後肋膜炎で入院す

一年遅れの国民学校

喜寿近く思えば何度か死んだはず

医学の進歩に救われて今

教え子の我より早き成仏に

思わず叫ぶ怒りのゞとく



力出す筋肉の仕組み不思議なり

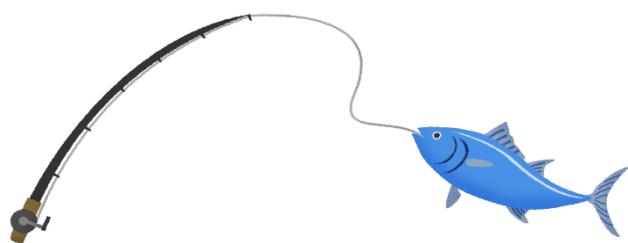
秘めたる力耐えるとき出る

砲丸を遠くに投げるひ弱な子

調べて見れば脚で蹴りおり

風のなぐ鏡のことき海面に

釣り人一人撒き餌を投げる



生きる証

ステントの「ゴッドハンド」と名を馳せし

名医の手術に生命をたくす
いのち

若き口に叩き込まれし根性を

使い果たして喜寿を迎える

マンションの眼下にひろがる田畠に
でんはた

種まく農夫の手つかあざやか



たつた今感銘深く聞きしこと

メモする前に頭から消ゆ

居眠りも欠伸も生の証あかしなり

気楽な老後の自然体

炎熱を避けてかきこむ力キ氷

喉元ひやせど頭ずつきんのどもと



堤防に何を思ひて佇むや

沈む夕日に老人ひとり

惜しまれて平成の世は過ぎ行きぬ

わが生き(ヤ)まは昭和に残る

いろいろと悩みはわれに尽き(ヤ)ねども

短歌にすれば言える不思議ヤ



近頃は妻があきれて言い放つ

「詠んでみたら、そのボケがまき」

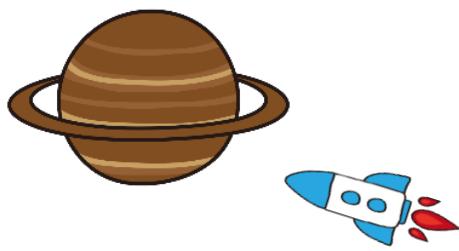
歐米いろいろ

研究を共にせし友マスグレイブ

宇宙飛行士に合格したり

宇宙船外活動成功の

友の偉業が世界に轟く



米国の留学助けし柔道の

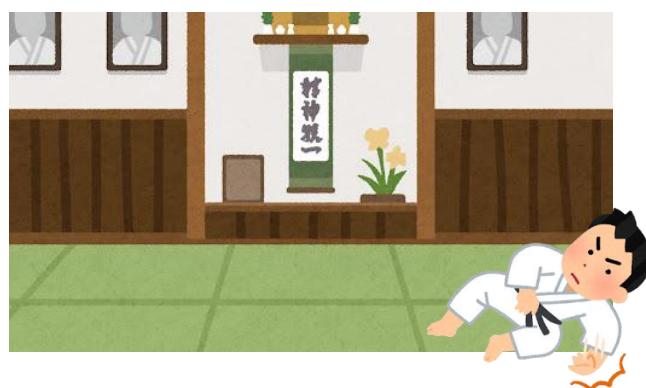
バイト相手の胸毛眩しき

柔道の愛子二人ベトナムで

戦死したとの訃報に接す

枯葉舞うミラノの秋は寒々と

郷愁やこう夕暮れどきに



半年づつ白夜と黑夜が交代す

サンタクロースのフィンランドでは

人間を柵の外から眺めてる

何が面白いのかサファリのインパラ

何ゆえに死に急ぐのかテロリスト

パリの事件のテロップ流る



リュウグウに穴をあけたるハヤブサの

宇宙の謎解き令和へつづく

苔むす宿

若芽ふく桜の古木の茂みにてせつせと

糸はる蜘蛛いそがしや

妻入院わが家の品物どこにある

妻まかせの日々反省しきり



早朝のゴルフの誘い断われず

肩・腰・膝に痛みのありても

生物のオス・メス分類役立たず

ヒトの分類ジエンダー・フリー

早朝にベッドの下を掃除する

自動掃除機わが家のペット



霞かと見紛う霧が立ち込めて

淡路の島は雲にとけゆく

ふるやことの曲りくねりし畦道が

コンクリートになつてしまいぬ

モンゴルの力士



夕焼けが茜散らして拡がりぬ

そよ風涼しき海辺を行けば

モンゴルの力士はみんな知っている

押さば廻って引き落とす技を

ボウフラの浮き沈みをばよく見れば

沈んでは浮き浮きては休む

垣根這うチロリアンランプ色づきて

明るく照らす冬枯れの道



イメージ出来しか走り出し

ギュギューンとバーを友は超えたり

ラグビーの五郎丸とうキッカーの

祈りのポーズみんな見つめる

モンゴルの国技のような大相撲

ガンバレ日本の関取たちよ



徐行する車列を縫つて突っ走る

命知らずのバイクライダー

沖縄の寒波

公園の剪定されし檉の木よ

寒くはないか木枯らしの吹く

冬の海風の凪ぎたる水面を

かすかに揺るがす海鳥三羽



沖縄を寒波が襲うその訳は

ラニーニャのためと専門家はいう

うすぐもる明るき昼の天空に

見事に開きし日暉ひかさをあおぐ

演奏会八万人が集いたる

トイレが気になる他人事ながら



日本はイイネ

テルアビブ空港に見送る青年は

「日本は良いね戦争なくて」と

シルクなら薄くて軽くて暖かい

われの肌着はこれに決めたり

底深いテトラポッドを滑落す

気が付けばまだ我是生きてる



朝転びいやな予感の一日を

無事に終わりて夕日を眺む

もう一度と逢うことのない友乗せて

靈柩車は行くしずしずと行く

ガザの街中

わが腕を刺したる蚊を殺したり

マンション六階タベの部屋に



血まみれの子を抱き走る青年の

ガザの街中瓦礫に埋まる

ニワトリの大虐殺の映像に

ヒトの惨^{むご}さを思い知りたり

難聽のわれを悩ますセミ時^{しぐれ}雨

夏が過ぎても居すわりており



仏教が繰り返し説く無と空は

何度も聞いても我にはむなし

ジプシーとクルドとロヒンギャ難民を

救う方法いざこにありや

カエルの足取り

啓蟄に姿あらわす一匹の

カエルの足どりよたりよたりと



蟬しぐれ我が耳去らぬものならば

共に生きむと決める冬の日

スマホうつ幼の小指が。ピンと伸び

人指し指が画面をつつく

アマゾンは多量の CO₂ 吸い込みて

温暖化から守りいるなり



このイワシどこを泳いでいたんだろう

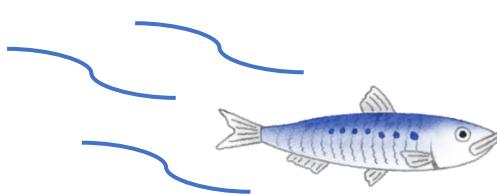
目玉パツチリ生きてるゾとく

真夏日の桜の幹にすがりつき

交尾しているアブラゼミ見ゆ

蟻たちが神輿のゾとく運ぶ翅

どこへ行くやら先頭いづこ



楊貴妃の顔

楊貴妃の住みたる華清池散策す
かせいち

四方八方花に囲まれ

掛け軸の楊貴妃の顔ふくよかなり

平安時代の女御のように

兵馬俑の表情あまた凜として

秦を支えし誇りがにじむ



西安の街をとりまく城壁を

登れば空中回廊の（）と

西安の五十余種なる水餃子

円卓まわりて客をもてなす

盆栽の松

盆栽の松の枝ぶり堂々と

歌舞伎役者の見栄きらびとし



いつよりか「鞭の会」の名称が

「無恥の会」へと変わりて続く

何故に舌を噛みそうな名をつけた

可愛い歌姫きやりーぱみゅぱみゅ

ベルリンの壁の跡には桜だと

募金つのりし友の夢叶う



箱根にて苔宿むす宿に落ち着けば

簾の奏でる音小気味よし

百歳人口

百歳を超えし人口七万人

八十路半ばはまだまだ若い
やそじ

風吹けばピューリ。ピュララと聞こえくる

窓の隙間が笛となるら



たんたんと生きし女優の樹木希林

自然に生きて自然にかえる

農業に転じし友の送り来る

トマトとナスに土の香のする

エジプトの象形文字を解く友は

かのクフ王のロマンを語る



おぼろなる月の影ふみ散歩する

逝きたる友の笑顔思いつ

活力の元

よれよれに疲れしからだに活入れん

好きなトンカツ活力のもと

たちまちに旬をすぎたる筈の

伸びる速さは「破竹の勢い」



ゴルフ後にひと風呂あびて飲むビール

老後の楽しさ(こ)に極まる

浅漬けのらっきょうの味サキサキと

食欲(う)き(う)われの好物

教え子(すくねこ)が送つてくれた酢(す)橘(だら)の実(み)

箱(ばこ)をあければ放(はな)つ香(か)りよ



一杯が二十五円の焼酎の

枡を溢れるサービスうれし

お坊さんバイクに乗って走り行く

盆が近づきや仏も忙し

今日中に済まさなくても良いことは

明日に延ばそうビールがうまい



ふるやとの伊豆

冬枯れの空き地の隅の葦の葉に

わが古里の葦山をおもう

何事もそれを仕事とするならば

楽しくも有り楽しくもなし

ふる里の伊豆から見える富士の山

大きくなくぼみも趣のうち



「ダメモトだ。恥を恐れず進みなさい」

わが師の言葉今も生きてゐる

ふるやうの田の草取りの夕暮れに

紅あかく染まりし富士のありけり

盆来れば墓参りを兼ね古里へ

想い出される伊豆の山々



真夏日の鏡の(ごとき)海面を

プレジャーボートが切り裂いてゆく

田植時の馬のからだは泥だらけ

小川に連れ行き洗いしタベ

里に来るクマ

古木なる桜の割れ目に集う蟻

忙しく動く今日も真夏日



クマたちが餌を求めて里に来る

かつて日本が侵略したがに

平成に使いし手帳三十冊

これがわが身の生きたるあかし

平成の最後の桜を見にゆこう

明日の桜は令和の桜



孫娘の電話の声は娘の声

そのまま転写の遺伝子情報

A-Iか核戦争のいずれかが

やがては人類亡ぼすだろう

慰安婦も徴用工も父の死も

戦争なれば起きえなかつた



紀国の山々

憎まるるカラスなれどもヤタガラス

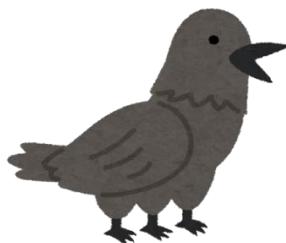
神を導き大和に至る

颶風の過ぎてゆきたる堀端に

カルガモ一羽うづくまりおり

桜散り古木の幹にはりつきて

名残りを惜しむ花びらひとつ



日溜りで昼寝むさぼるネコ一匹

大きく欠伸す新春のはじめに
はる

夜釣りする光の浮きが見え隠れ

されど釣り人影さえ見えず

きのくに
紀国いづみの山々つらねる和泉嶺ねの

稜線くつきり冬空を斬る



ビニールに覆われていしチシャの葉が

カバーはざされワツと顔だす

城のシャチホコ

あさごからの梅雨^{つゆ}どきの雨に濡れながら

女子高生が家路をいそぐ

潮かおる一色の浜の岸壁に

夜釣する人微動だにせず



公園に脚一本のハトがいる

「どうしたのか」と尋ねて見たし

ゆるやかな^{なまこ}波たちし内濠に

真鯉の^{マコ}とく泳ぐしゃちほこ

公園を散歩するのになぜマスク

澄んだ空気が一杯あるよ



蟻の列せつせと運ぶチョウの翅

どこへ行くのか見定めがたし

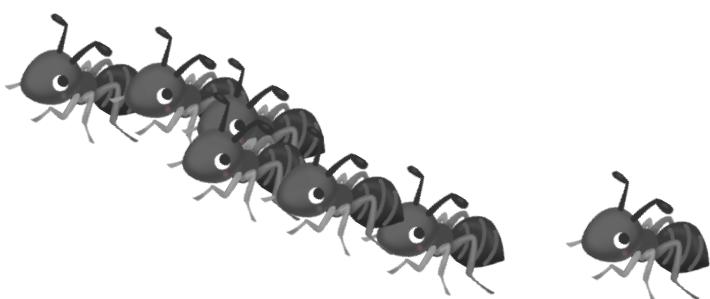
小雨降る岸和田城の天辺の

濡れしシャチホコ光りて跳ねる

我が魂うばう

ナイアガラ瀑布の水量すさまじく

わが魂奪いどつと落ちゆく
たま



海面に平たい石を投げる子ら

水切り撥ねる石の軽さよ

日の当たるベンチに腰け草引けば

はやばや春の匂いがするなり

月の世に吠える野犬の声高し

うちなる野生に目覚めおらんか



岸和田の城の天守が逆さまに

左右は変わらず揺れ動いて

カジノです。その一言が言えなくて

IRという政治の狡知

朝ぼらけおぼつかなさを覚えつつ

外出すれば脳なすきが疼く



年寄れば耳鼻科泌尿器科糖尿病

病院予約で手帳が賑わう

八十路とは八十歳と辞書にある

「八十代」とわれは書きたし

死んで帰れ

戦地より届きし父の手紙には

軍靴かじる日々記されており



神棚に松とくるみを供えしも

祈り届かず父は戦死す

久々に母の遺品をひもとけば

戦死し父の赤紙出で来

戦時下の防空頭巾はいまマスク

戦う相手は不気味なコロナ



戦死せし父はそのとき三十五

母は三十子どもが三人

戦死せし父の墓には母と兄

墓参に行きたしコロナがなければ

出征の兵士を送る歌だった

「死んで帰れ」と大声あげて



われ七歳大人は正座し泣いていた

終戦の日の玉音放送

滑落のテトラポッド

ドングリがポコソと頭に当つたよ

滅多にないこと今日は良い日だ

鉛直の垣根に育つなんきんを

支える辛苦蔓のみぞ知る



エアコンを掃除したのちテストする

吹き出す冷気にくしゃみ一発

耳遠く会議の討論聞き逃す

みんなが笑えば私も笑う

ボクサーが放つパンチの鋭さよ

狙うは互いの鼻のてっぺん



うかつにもテトラポッドを滑落す

気づいて見れば右足が頭上

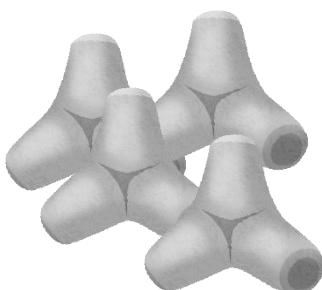
悪運強き人生

わが人生長生きするのは良いけれど

妻の後にはなりたくないね

年寄れば足がもつれて頭打ち

八針縫えど脳(なづき)は無傷



救急車命の尊き競うべ」と

サイレン鳴らし走り抜けたり

歌出来る時に限つて手帳なく

箸袋に書いて財布にしまう

八十路まで生きてるなんて何とまあ

悪運強き人生なんだ



©DLSIGNALIKI

ロスを出てラスベガスまで五時間余

エンジン焼き夏の砂漠に

デジタル化の世

人間のアナログ脳はデジタルに

敵わぬことを将棋が教える

パソコンの変換ミスが惹き起こす

新しき世の新しき混乱



学生の私語にヒントを得た研究

発想素朴で結果は有用

研究は意外な結果が貴重なり

単純なれどもその意味深し

何もかもデジタル化される世の中で

詩歌が守るアナログの世界



あとがき

思えば今から約十年前に短歌と出会い、岸和田市八木地公民館の短歌教室に加えて貰い、以来十年余が過ぎた。月二回の教室で一回に二首提出するのだが、それが何と四百首を越えた。本歌集はそれらを中心に、自分の人生観を詠みこんだ歌なども含めた百八十三首を選び、「花火」のタイトルでまとめた。

本歌集を閉じるに当たり、短歌教室の鈴木きよこ先生と守行慶子先生、および装丁を担当された藤田英和氏（特定非営利活動法人みんなのスポーツ協会最高顧問）に深謝の意を表します。

令和七年十二月二十日





私の短歌

花 火

<作者略歴>

金子公宥(かねこまさひろ)

昭和 13 年生まれ、静岡県伊豆の国市(韮山)出身

教育学博士(東京大学)

大阪体育大学名誉教授、中国西安体育大学名誉教授

日本バイオメカニクス学会会長

国際体力研究学会(ICPFR)副会長など歴任

叙勲:瑞宝中綬章(2020 年)

編集・装丁：藤田英和(ふじたひでかず)

NPO 法人 みんなのスポーツ協会最高顧問

制 作：特定非営利活動法人 みんなのスポーツ協会

ホームページ:<http://www.npo-minspo.ne>



